

地方中小企業の人材ニーズと 独自の人材育成

小野教授が所属する福岡大学とそれぞれにつながりを持つ
地元中小企業トップとNPO法人への取材を通して、
企業のグローバル人材のニーズと、その育成のための取り組みを紹介する。

インタビュー

本多機工（株）代表取締役社長 龍造寺 健介

「通じる程度」の英語力と どこにでも行ける機動力

龍造寺健介氏は、福岡大学のGAP科目の講師として大学に協力している。英語で、米国滞在の経験や、自社の海外展開の話を通し、グローバル人材の必要性を伝えている。

地元経済団体のメンバーであり、地元企業の情報に精通。企業の海外展開の現状について、「九州はアジアの玄関口なので、中国や韓国、タイ、最近は特にベトナムやインドネシアへの進出が活発。これからはミャンマーに製造拠点、販売拠点を拡大する動きが出てくるだろう」と話す。

同氏が経営する本多機工（本社・福

岡県嘉麻市）は産業用ポンプの受注生産メーカーである。世界60か国以上に納入実績があり、ドイツ・米国のメーカーと技術提携する。アジアを中心とする各国に21社の代理店網がある。これまでに、九州の大学で学んだ日本留学経験者を中心に14人採用。そのうち2人は自国に戻り、自社製品を扱う代理店を開業するなど、外国人材の活躍が販路拡大に貢献している。

「グローバル人材は、どこにでもすぐに飛んで行く必要がある。日本人上司であっても英語が上手である必要はなく、通じればいいと割り切って臆せず話せることが第一。違うと思うことははっきり『NO』と伝え、良いことは『いいね』と共感できる能力が必要だ。どんな

に語学力があっても、偏った考え方、見方をする人には異文化の人を相手にする仕事を任せられない」と話す。

地域の可能性と 課題をふまえ啓発活動

同氏は、近年、日本の若者の「内向き志向」に危機感を覚えるという。地元経済団体などを通して高校や大学への出前授業に積極的に関わっている。九州と台湾を比較し、「面積や人口、GDPはほぼ同じだが、輸出額や外資系企業数は圧倒的に台湾が多い。これは、グローバル化を真剣に進めてきたかどうかの差であり、今後は九州から積極的に外に出ていく必要がある」と力説する。

レポート 地元企業中心のNPO法人による「Breakthroughプロジェクト」

企業が与える課題の下 学生と留学生が協働

アジア展開をめざす九州の中小企業と留学生、日本人学生による課題解決型の長期インターンシッププロジェクト「Breakthrough（アジア市場突破）プロジェクト」は、福岡大学の阿比留正弘教授がコーディネーターを務めている。同氏は、福岡大学における起業家育成の授業をベースにこのプロジェクトを立ち上げた。

プロジェクトの関係者は「日本での就職を希望して学びに来る留学生が大半だと思うが、外国人採用枠のある地元企業が少ないため、母国に帰らざるを得ないのが現状。企業側も、海外進出をしたくても、

担当できる人材を自力で見つけたり育てたりできない」と話す。日本人学生と留学生は問題解決力や異文化対応力を身に付け、企業側は留学生の親戚等のつながりを活用して海外進出できる利点がある。

2011年度から始まったプロジェクトは、地元の中小企業が多く加盟するNPO法人ASIAが主催する。大学の組織的関与はなく、2013年度は福岡を中心とする13大学の学生・留学生約150人が個人で参加した。地元企業のアジア市場への販路拡大に向けた商品の企画・開発、そのための調査等を留学生と日本人学生の混成のグループ同士で競わせる。

2012年度は、地元の文化を生かした長崎らしいスイーツを開発した冠婚葬祭業企

業のプロジェクトが優勝。2013年度は、中国伝来の唐芋を原料にした芋焼酎を、日本の芋文化としてアピールし、販路拡大に成功した焼酎メーカーのプロジェクトが優勝した。企業人のリードの下で学生・留学生が地元文化への理解を深め、これを異文化と融合させる企画力などを育成している。



学生が上海で試食調査を行う様子